

グローバル社会におけるメディア・リテラシー入門 中間報告

京都橘高等学校教諭 長谷川 卓也

1. はじめに

京都橘高等学校は「文武両道」を掲げる進学校であり、生徒の目標、適性に応じたV・S・B・Aの4コース（いずれも普通科）を設置している。

本稿ではBコース（英数特進コース）1年生を対象にした「Global Perspective」と題した実践（以下GP）について報告する。GPは、グローバル社会で求められるメディア・リテラシーの育成、特に初期指導を目的としており、海外メディアのWebニュース（英語）の書き写しを、主な活動としている。

なお、GPは現在（執筆6月30日）進行中であり、高校1年終了時まで実施予定である。ここではその中間報告を行う。

2. 問題意識

まず、GP実施に至る社会背景、筆者の問題意識について説明する。

2-1. グローバル社会

グローバル社会を一言で言い表すことは難しいが、人、物、金、情報、価値観など全てのものが地球上を自由に行き交い、競争が進む社会と言えよう。そのような社会において私たちは、日本国内の事象だけでなく、世界の動向について知り、判断し、行動することが求められる。また、そのための英語力が必要とされる。

2-2. マス・メディアを利用した情報戦

近年、自国の優位性を高めるために、ソフト・

パワーを強めようとする動きが見られる。ソフト・パワーとは、軍事力、経済力などといったハード・パワーに対する概念で、文化や価値観の影響力のことを指す^[1]。このソフト・パワーを強めるために、メディアが利用される。高木は著書『国際メディア情報戦』^[2]で、今日の情報戦を「『出す』情報戦」と表現する。情報戦と言うと、スパイによる秘密情報の探り合いとイメージされるかもしれない。しかし、現代の情報戦は「情報を少しでも多くの人の目と耳に届け、その心を揺り動かすこと」と説明する。著書には、国が自国の戦闘行為を正当化するために、戦略的にメディアを利用した事例が紹介されている。

2-3. メディア・リテラシー

メディア・リテラシー教育が海外で始まった当時、メディア・リテラシーとはマス・メディアの情報を批判的に読み解く能力として扱われていたように思う。その意味する範囲は情報技術の進展とともに拡大し、現在ではメディアの情報の「受信時」の能力だけでなく、情報の「発信時」の能力も含まれるようになった。発信時の能力とは、メディア（文字、音声、映像といった表現メディアなども含めた多義的なもの）を活用し、適切に情報発信できる能力のことを指す。

2-4. メディア・リテラシー教育

高等学校学習指導要領（2009年）の科目「社会と情報」の内容説明に、「情報の受信及び発信時に配慮すべき事項を理解させる」とある。そして内容の取扱いの説明に、「情報の活用と表現」に

ついて「情報の信頼性、信憑性及び著作権などに配慮したコンテンツの作成を通して扱うこと」、そして「情報通信ネットワークとコミュニケーション」について「電子メールやウェブサイトなどを取り上げ、これらの信頼性、利便性についても扱うこと」とある。

ただし、同学習指導要領の全文中に「メディア・リテラシー」の語は一度も出てこない^[3]。また「情報」の教科書においても、「メディア・リテラシー」の語を取り上げていないものがある。こうして見ると、メディア情報を批判的に読み解くことの重要性を、十分に強調できていないのではないかと思う。

しかし、今日の社会を眺めたとき、その重要性は間違いなく高まっていると言える。ソーシャル・メディアの普及にともない、個人が容易に情報を発信できるようになった。アラブの春に見られたように、その力は時に一国を覆すほどの影響力を持つ。また、意識することは少ないが、前述のようなマス・メディアを利用した情報戦のまっただ中に私たちは生きている。メディアに対する批判的読解力の必要性は高まるばかりである。

このような問題意識の中、GPを実施した。

3. 実践内容

3-1. GPの位置づけ

対象クラスは高校1年Bコースの2クラス（生徒数31名・32名）である。同コースでは、「情報の科学」を1年次に履修する。高校3年間の中で「社会と情報」を履修することはない、それを補うために「社会と情報」の内容の一部を1年次の授業に取り入れている。それがGPである。GPはオプション的な意味合いもあり、授業内では説明、まとめ等にとどめ、活動の大半は宿題として行っている。6月から始め、第1学年終了時まで継続して行う予定である。

3-2. ねらい

最終目標は、「メディアの意図を意識しながら、情報を批判的に読解する。さらに複数の情報源か

ら情報を入手し、物事を多面的に見て判断する」というものである。さらにその情報は「英語」という設定である。

しかし、短期間のうちにこの目標を達成させることは不可能である。生徒はそれほど世界の動向に関心を持っているわけでもなく、英語力があるわけでもない。まずは、海外ニュースのチェックと英文の読み書きを日常に取り入れることを目的とした。GP開始の6月の段階で生徒に課したのは、海外メディアの英文記事を毎日書き写すことのみである。

今後は段階を追って、目的、活動内容を変えていく予定である。詳しくは「5. 今後に向けて」で述べる。

3-3. 対象メディアと分担

クラスを6班に分け、班ごとに担当するメディア（下記）を指定した。班をさらに2つに分け、片方のグループを自国ニュースの担当、もう片方のグループを世界ニュースの担当とした。「その国の事象」だけでなく、「その国が注目する世界の事象」にも目を向けさせた。

なお、6班に分けたのはコンピュータ教室の机の配置の事情による。その結果として、調査対象が6メディアとなった。

メディアの選定は生徒ではなく筆者が行った。英語の記事をWeb配信しているメディアを探し、その中から地域バランス、日本との関係、本校との関係等を考慮して決めた。マレーシアのメディアを取り上げたのは、高校1年の3月に実施されるマレーシア研修旅行の事前学習のためである。

次に、取り上げたメディア名、メディアの所在国、そしてURLを記載する。なお、URLはWebサイトのトップページのものである。

(1) NHK WORLD（日本）

<http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/index.html>

(2) 新華社（中国）

<http://www.xinhuanet.com/english/home.htm>

(3) BERNAMA (マレーシア)

<http://www.bernama.com/bernama/v7/index.php>

(4) アルジャジーラ (カタール)

<http://www.aljazeera.com/>

(5) France24 (フランス)

<http://www.france24.com/en/>

(6) CNN (アメリカ)

<http://edition.cnn.com/>

3-4. 生徒の活動

生徒は自分が担当するWebページにアクセスし、トップ記事のタイトル(10語前後)とリード文(20語から30語程度)を所定のプリントに書き写す。前述のとおり、6月段階で日本語訳は特に指示していないが、実際には日本語訳を行なった生徒もいた(アンケート参照)。

記事のチェックとプリントへの記入は毎日1回行うこととした。ただし、記事のチェックの時刻は指定しなかった。授業がある平日、授業がない平日、休日と、日によって生徒の生活時間が異なるため、また生徒によっても生活時間が異なるためである。なお、本校では携帯電話の持参は認められているが、校内では常に電源をオフにしておかなければならない。

4. アンケート分析

3週目を終えたところでアンケートをとった。記名で実施し、60名(出席生徒全員)より有効回答を得た。結果は次のとおりである。

4-1. 数値データより

(1) 難度

英語の授業で習っている英文と比較して、ニュースの英文の難度はどれくらいか

選択肢	回答数
たいへん難しい	26
少し難しい	27
同じくらい	6
少し易しい	1

(2) 意味理解

ニュースの英文の意味は分かるか

よく分かる	0
少し分かる	29
あまり分からない	24
まったく分からない	7

(3) 難しさの要因

ニュースの英文に当てはまるものは(複数回答)

初めて見る英単語が多い	50
固有名詞が何を指すのか分からない	19
略語の意味が分からない	26
文法が難しい	37
一つの文が長い	30
その他	0

(4) 辞書の利用

ニュースの英単語を辞書で調べるか

よく調べる	3
時々調べる	10
あまり調べない	24
まったく調べない	23

(5) 数値データ部分のまとめ

英文記事に対し、9割の生徒が「たいへん難しい」「少し難しい」と答え、5割の生徒が「あまり分からない」「まったく分からない」と答えた。

難しく感じる要因として「初めて見る英単語が多い」ことが挙げられるが、辞書で「よく調べる」「時々調べる」の回答は全体の2割にとどまった。ただ、見方を変えれば、指示されたわけではないのに2割もの生徒が辞書で調べたとも言える。

4-2. 言語データより

(1) GP課題の感想

- ① 長い英語を見る機会は学校以外でそんなになかったのでもいい機会になった。
- ② わからない単語が多すぎて書くのに苦労した。日本がこんな風に海外へ情報を発信していることにびっくりした。
- ③ ニュースを見て気になったことは携帯の翻訳で日本語の文を読んだりした。
- ④ 一度だけ日本のニュースが出てきて、自国が

他国で報道されているというのは、なんだか変な感じでした。

- ⑤ 日本とは違い、海外では、大変残酷なことが起こっているの、写真や文章を見て、つらく思います。
- ⑥ 時差を感じる事ができてよかったです。
- ⑦ 英語の授業よりものすごく難しかったです。知らない単語は辞書で調べました。意味を調べたら、なるほど、こういう意味だったのかと思いました。
- ⑧ イラクのことがたくさん出ており、CNNは世界の中でも読まれているほうなので、世界の目はイラクに向いているのかな、と思った。今までイラクのイメージは紛争や核爆弾を持っているというイメージだったが、しっかり訳はできていないがもうちょっといい感じなのかなと思った。
- ⑨ 日本語訳をしてみると日本のメディアとは書き方が違い、国々によって重視するものの違いに気付けたことはよかったです。
- ⑩ 英語を書くスピードが速まった。
- ⑪ これを授業以外で個人的に続けろと言われても面倒くさくてやらないと思います。
- ⑫ ただ単に文字を写しているだけでした。外国でも小学生新聞などがあるのなら、小学校新聞などから始めてみたいです。
- ⑬ 毎日調べるのは、忘れてしまいそうだったり大変だった。でも慣れれば苦ではなくなってきました。
- ⑭ この課題をやって良かった事が2つあります。まず1つ目は、海外の関心が少し強くなったことです。2つ目は、英語のアルファベットの書くスピードが、速くなったことです。書くスピードが速くなると、授業の板書が速くなり、先生の話聞く事が出来るようになりました。
- ⑮ 初めて、こういう風な外国の本物のニュースを毎日調べる機会が出来てとてもいい経験になったと思う。文が長くて大変だったけど、見返すと達成感があって楽しかったです。

- ⑯ 日本のメディアと注目する所が微妙に違ったので面白いと思った。

- ⑰ 分からない単語がほとんどだったが、たまに知っている単語が文中にあったとき嬉しくなった。

- ⑱ 添付されている動画などを見たのでだいたいの意味を把握することができた。

(2) 言語データ部分のまとめ

生徒にとって「面倒くさい」課題であったはずである。しかし記名ありのアンケートだったためか、予想よりも前向きな内容の回答が多かった。感想の量（文字数）も多かった。前出の言語データは、一部の生徒の一部の記述を紹介したに過ぎない。回答から、生徒の自主的な学習行動や気付きがあったことも読み取れる。手前味噌になるが、生徒自身の好奇心や謙虚さ、クラスの前向きな雰囲気によるところが大きい。

5. 今後に向けて

7月からはニュースの内容がおおよそ分かるように、日本語訳を併記するように指示した。辞書を使い、自力で訳すことが理想であるが、今回は翻訳サイトの利用も認めた。この段階でハードルを高くしてしまうと、長続きしないからである。GPを日常に取り入れることが先決である。毎日海外メディアの英文記事をチェックし、その意味をおおよそ把握する。当面はそれだけで十分である。

1月以降は、メディアごとに情報の傾向分析を試みる。そしてメディアには意図が存在することを気付かせたい。実質的にはこれが1年次の最終目標になる。

参考文献

- [1] ジョセフ・S・ナイ（著）、山岡洋一（翻訳）『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』2004年9月 日本経済新聞社
- [2] 高木徹『国際メディア情報戦』（2014年1月 講談社現代新書）
- [3] 国民教育文化総合研究所『メディア・リテラシー教育研究委員会報告書』2008年7月